

専修大学社会科学研究所月報

〈高橋七五三教授最終講義〉

経済学部長挨拶

望月清司

皆さん、よくお集まりくださいました。ただ今から、経済学部教授、高橋七五三先生の最終講義を開催いたします。先生は、本学の専任教員としては28年間、その前の兼任講師の期間3年を加えると31年間にわたって、専修大学の教壇に立ち続けられ、多くの学生を育てて下さいました。本日は、その御講義の文字どおり最後の、先生ご自身にとってはもとより、私たちにとっても記念すべき講義になります。この教室には、それぞれお忙しい中を来て下さった10何人かの先生方もおいでです。他学部の先生の顔もお見えます。おそらく今日が初めて高橋先生の御講義を拝聴する面々ですが、これからの一時間、久し振りに学生にもどって、先生が蓄積してこられた御研究の一端を伺い、学生諸君と一緒にあらためて先生への敬愛の念を新たにしたいと思っております。単に一番最後の授業というにとどまらない「最終講義」の意味がここにあります。

経済学部でこの3年間に定年をお迎えになった方々のうち、一昨年の内田義彦先生、昨年の大友福夫、西田 勲両先生、それに今日の高橋先生たちは、昭和20年代の半ばから以後、わが学部の長い伝統を受け継ぎながら、戦後の新しい骨格を作ってこられた先生方です。この生田校舎がまだ木造のバラック群だった時代、図書館に本もそろってなく、冬の石炭ストーブの石

目 次

経済学部長挨拶	望月 清司 (1)
同僚代表謝辞	内田 弘 (4)
〈最終講義〉	
ポパーの方法論と経済学	高橋七五三 (6)
編集後記	(20)

炭が午後の授業にはもう無くなっていた時代。そういう時代から、言うに言われぬ御苦勞を重ねながら、こんにちの専修大学の基礎を築いてこられたのであります。伝統というものは、一人一人がそれぞれの確実な石を一つ積み上げて去って行く、そうした営為の中からおのずから高く立つものだとすれば、高橋先生はその御研究とお人柄によって、私どもの学部に忘れたい石を一つ積まれたと申すべきでありましょう。

先生の学問的なお仕事の歩みについては、のちほど、この「経済学方法論」の講座の跡継ぎをされる内田 弘教授から詳しくお話しがあると思いますので、私は、お手もとの「最終講義資料」にある先生のご略歴を補うような形で、先生の風貌の一端を皆さんにお伝えしようと思います。

略歴でござんのように、先生は東京の小石川(現在の文京区)というところに、大正3年11月15日にお生まれになりました。先生のお名前を最初にみて、これをシメと読める人はまずよほど物知りかカンの鋭い人と思いますが、お誕生の日がちょうど、子供の成長を祝い祈る「七・五・三」の日に当たっておられたから、と伺っています。お正月のようにおめでたい日に、家の玄関などに飾るシメ飾りというのがありますが、あれはもともと、神社など神聖な場所を表わすシンボルであるシメ縄を簡略にしたものと聞いています。本来のシメ縄は、左の方から間において、7本・5本・3本のワラを垂らしてあるのだそうで、これは一夜漬けの勉強ではじめて知りました。こういうわけで、表記の上でも発音でも、言わば二重におめでたいお名前なのですが、現実の先生は、おめでたいどころか極めて辛口の「毒舌家」としても有名であられます。先生は、戦後はおもに農業問題、特に農業金融の分野でたいへんなお仕事をなさったので、その方面で多くのご友人をお持ちですが、その方々の間では、「からみのシメさん」という畏敬をこめたあだ名で呼ばれているようでありまして、その方々が先生の還暦記念論文集を編集しようと相談された時、「からみ」、つまり論争好きの「シメさん」の記念論文集だから、書く人はみんな必ず誰かを相手どって論争を挑む形の論文を書くことにしよう、と衆議一決したらしい。それが、この「最終講義資料」の「主要業績」にある『論争・日本農業論』という本です。

小石川、そして隣の本郷といえは、「芝で生まれて、神田で育ち……」といった、徳川以来の「江戸っ子」とは、また違った意味で、いわば新しい「江戸っ子」の産地でありました。東京帝国大学が本郷にあったからというわけでもないでしょうが、魚河岸風の江戸っ子からは一枚も二枚もむけた、「知的な江戸っ子」といいますか、あるいは「山の手風の江戸っ子」として、先生は人となられました。

夏目漱石の「坊っちゃん」も、本郷の隣の小石川生まれであります。お若いころの高橋先生は、「坊っちゃん」のようにケンカっぱやいところがお有りです。私は昭和38年に助教授に

なり、教授会の末席に連なることになりましたが、学部長になられる前の先生は、少なくとも年に一回は、教授会で議論が激している最中、突然「ワシは帰る」とおっしゃって席をお立ちになり、後も振り返らずスタスタとお帰りになられました。

しかし、経済学部の先生方は、そういう時をも含めて、高橋先生にたいする信頼感を取り下げることはありませんでした。スジを通すことであくまでガンバリながら、それを根にもたず、次ぎの日にはカラッとした朗らかな笑顔を見せられる、そうしたお人柄を熟知していたからであります。

高橋先生は、慶応義塾大学の学生時代からロビンソンやチェンバレンなど、イギリス・ケンブリッジ学派の近代経済学に親まれ、卒業後は、銀行集会所の調査部に勤務されて研究者としてスタートされました。その時代の金融経済にかんするお仕事は、のちの農業問題研究と結び付いて、農業金融という特殊な分野での綿密なご研究を続々と発表される事になります。また、先生が中国から復員されてまもなく、林業経済研究所にお勤めになっておられたころの御研究の成果である『林業経済の基礎理論』は、思えば42,3才ごろの作品ですが、林業地代という難かしいテーマをマルクス経済学の方法で初めて体系的に分析された野心的労作で、今では古典的名著の類に属すると伺っております。

先生は、本学で多くの重要な役職をつとめてこられました。なかでも昭和46年から49年までの経済学部長のお役目は、全国的な大学紛争の余熱さめやらぬ時期であっただけに、今の私などには想像もつかぬほど大変な御心労を重ねられました。先生が学部長2期目の途中で退任されたのも、その御心労に近因する御病気のゆえでして、先生が担われた重荷のほんのわずかでも替わってさしあげられなかった私たちとしては、真に申し訳ない思いで一杯です。

しかし先生は、持ち前のヴァイタリティで御病気と闘われ、今こうしてお元気な姿で最終講義をなさいます。このことに、私たちは心からの拍手を送りたいと思います。

そればかりではありません。先生はこの数年、今日の御講義のテーマであるカール・ポパー（やその他の人々）の科学哲学と真正面から取り組んで、これと格闘しながら新しい社会科学方法論への道を模索されつつあります。70才といえ、もう老先生と呼び呼ばれて少しもおかしくはありませんのに、高橋先生は、私たちみんなよりずっと若々しく、学問の最先端をいとも楽しげに走っておいでです。そのお姿から私どもは、たくさんのお話を学ばされます。

今日を最後に、教壇にある先生とお別れするのは寂しい限りですが、これからますますお元気で新しい領域への挑戦をお続けになり、学界に貢献なさいますよう皆さんとともに祈念して、学部長あいさつといたします。